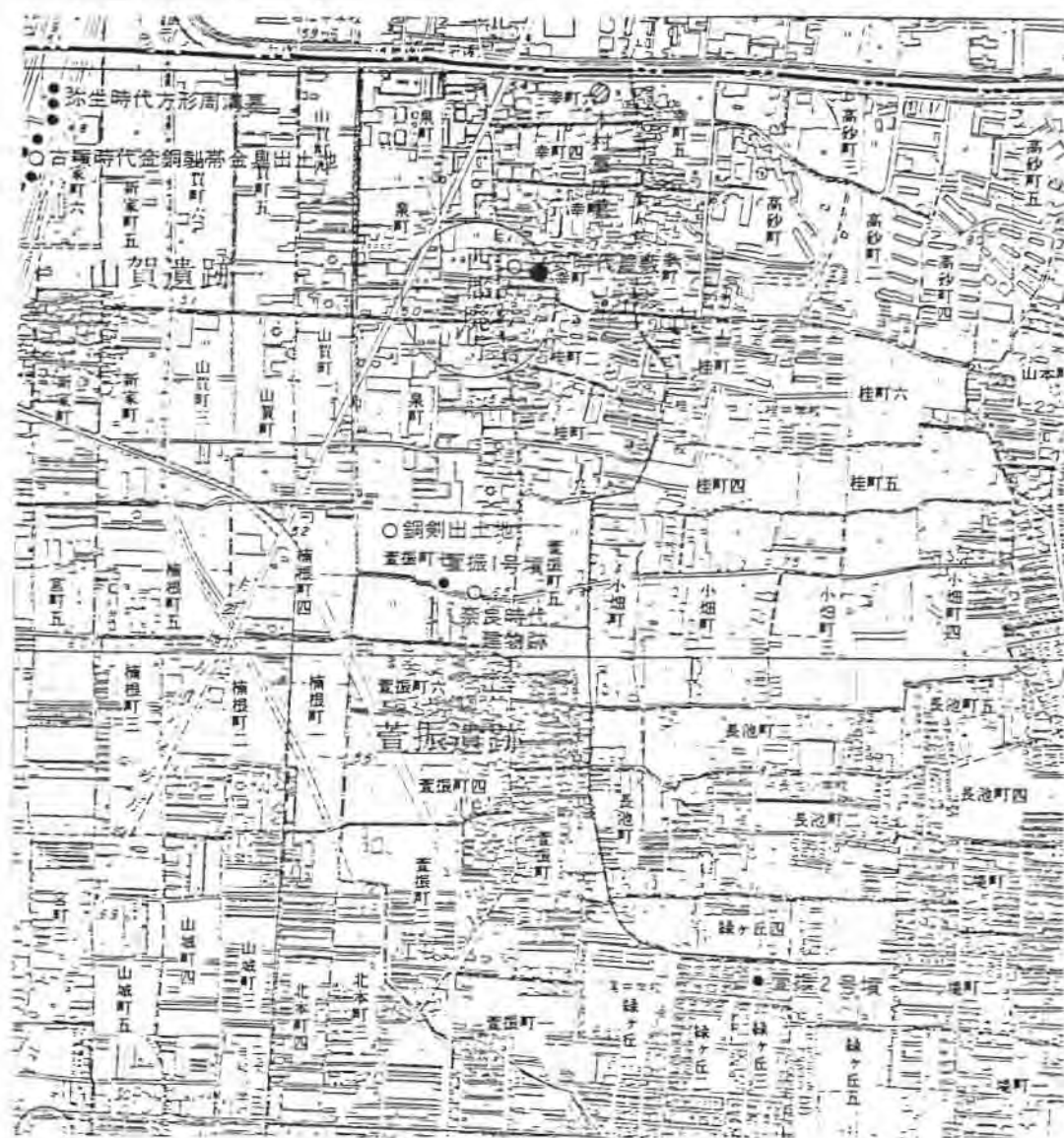


萱振遺跡 (第6次調査) 一般公開資料

1988年8月6日(土) 午前10時～午後3時

(財)八尾市文化財調査研究会

調査箇所 八尾市幸町1丁目60-1
 調査期間 昭和63年6月22日～8月10日
 調査原因 住宅建設
 調査面積 260㎡



調査位置図

◆はじめに

萱振遺跡は、八尾市の中央部の緑ヶ丘地区から北部の桂地区に広がる弥生時代中期から鎌倉時代後期に至る複合遺跡であります。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川の右岸一帯に広がる低位沖積地に当たります。

このたび、(財)八尾市文化財調査研究会が住宅建設に伴いまして事前に発掘調査を実施してきました。その結果、現地表下1.2～1.5m前後で平安時代後期・江戸時代後期の生活面を確認しました(第1調査面)。さらに、0.6～0.7mを掘り下げた結果、弥生時代後期の生活面を確認しました(第2調査面)。今回、第2調査面の調査がほぼ完了しましたので一般公開します。

◆検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居2棟(SB-1・2)、井戸1基(SE-1)、土坑2基(SK-1・2)、溝1条(SD-1)、小穴1個(SP-1)を検出しました。以下、主な遺構について説明します。

竪穴住居(SB)

SB-1

上面の形状が隅丸方形を呈するもので、幅は東西方向南北方向ともに5.3m前後を測ります。支柱穴は4個で、4個をつないだ形状は方形を呈します。柱の間は2.5mを測ります。支柱穴のうち、南西の柱穴を除く柱穴内には柱根(柱材)が残っていました。この竪穴住居は火災にあったものとみられ、建築材である垂木が炭化材となって放射状に倒れていたほか、大量の炭・灰が出土しています。遺物は、特に壁面付近から壺4個・鉢4個・台石1個が出土しています。

SB-2

竪穴住居の約4分の1を検出しました。大半が調査区外のため全容は不明ですが、現状からみて円形を呈する住居であったものと推定できます。支柱穴は1個が確認でき、内部には柱根が残っていました。SB-1と同様焼失家屋で、内部からは垂木が炭化材となって残っていたほか、一部では屋根材(カヤ?)が残っていました。遺物はカメ2個・鉢1個のほか、人頭大の焼土塊3個が壁面付近から出土しています。

井戸(SE)

SE-1

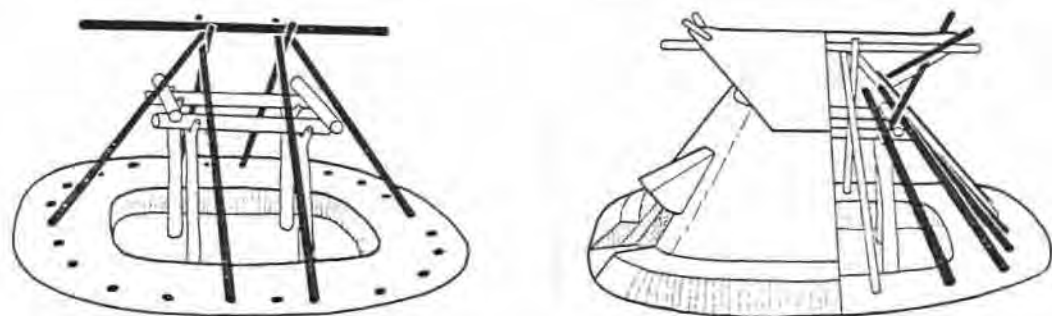
SB-1の東部で検出しました。上面の形状が円形を呈するもので径1.8m深さ0.9mを測ります。内部から壺・カメ・高杯・木製品が出土しています。

◆まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の焼失家屋2棟を中心とする居住区を確認しました。さらに、同時期の遺構を当調査地の西約50mの地点で（昭和59年12月調査）検出していることから、すくなくとも東西約100mにわたって当時の居住地が存在したことが明らかになりました。

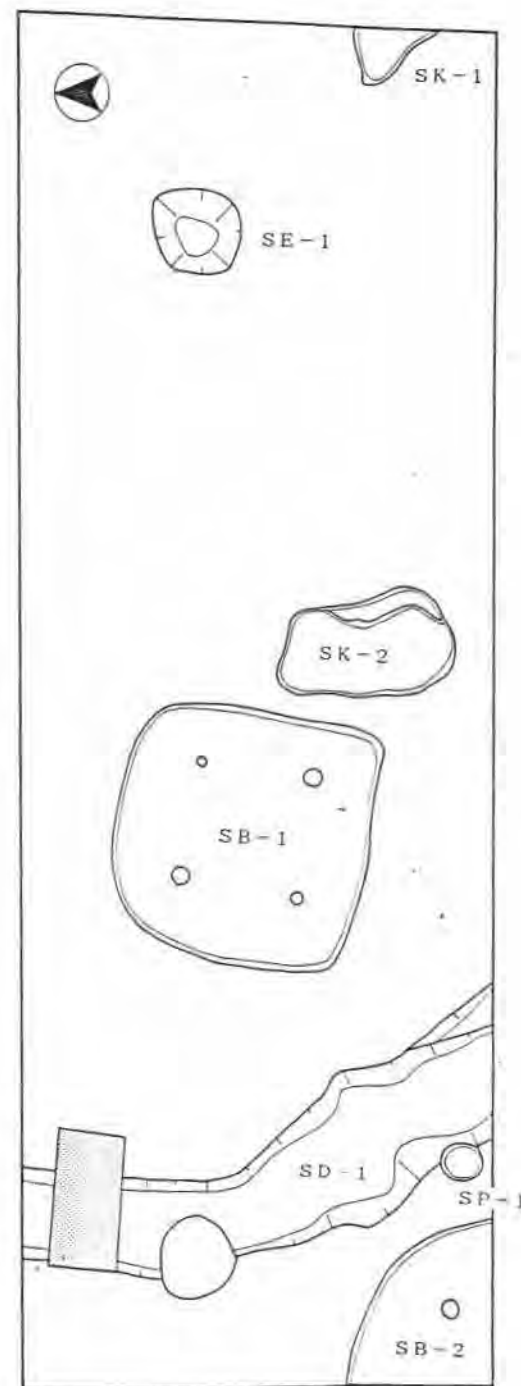
また、当調査地の西側には山賀遺跡が存在しており、近畿自動車道に伴う発掘調査等で同時期の水田・溝が検出されています。これらの調査では、当時の生活面の海拔が1.3～3.1m前後とされています。今回の調査区の海拔は4m前後でありますから、当調査地付近が当時比較的安定した土地であったことが推定できます。以上から、当調査地付近の弥生時代後期の環境は、居住域が微高地である当調査地一帯、生産域（水田）が西側一帯に広がる湿地帯に存在していたものと推定できます。

なお、弥生時代後期の焼失家屋の例としては周辺では、^{和歌山}鬼塚遺跡（東大阪市）・^{じょうやま}城山遺跡（大阪市）等があります。



竪穴住居復元図

〔メモ〕



検出遺構平面図